はじめに

本講義はある程度現代文を勉強した人が旧帝大などの難関国公立大合格レベルに達するための講座です。ですから、問題も講義内容も最高峰のものを用意しました。予習の段階で全くわからない問題があったとしても気にせずに講義で理解してください。すると、当初は難しいと思えた問題にも太刀打ちできるようになるでしょう。

五日間でみなさんの頭脳に革命を起こしてみせます。

本講義の現代文の考え方

本講義は文章を従来の「意味論」だけでなく「統語論」の側面からも解説していきます。もちろん文章には「意味」があります。しかし、「意味」というのは読者の側に生成される主観的なものでもあります。ですから、「意味」ばかりを追求していくと、「読者によって意味が異なる」ということが起こり得るのです。

一方、大学入試の問題はたとえ最高峰の記述問題であろうとも、「読者によって解答が異なる」ということはありません。そこには客観的に正しい答えがあって、その答えや答えに至るプロセスがいかなるものかによって点数がつけられます。であれば、言語の客観性である「統語論」的側面を無視することはできません。言語の「統語論」的側面とは以下の三つです。

①　**文法**

②　**構文**

③　**論理**

たとえば、①文法ですが、筆者によって副助詞の「も」の使い方が異なるということはあり得ません。また、読者によって副助詞の「も」の機能が異なって受け取られるということもあり得ません。副助詞の「も」は、たとえどんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

また、②構文ですが、本講義では「主語―述語」の関係や、「修飾語―被修飾語」の関係や、「接続語―被接続語」の関係からなる文構造のことを構文と呼びます。この構文に関しても、文法と同様のことが言えます。読者によって「文の主語―述語が異なる」ということはありません。構文もまた、どんな筆者であろうと、どんな読者であろうと、客観的に機能します。

最後に、③論理ですが、ここが本講義の最大の特徴です。①文法や②構文は「日本語」という言葉のルールです。それに対し、③論理は「日本語」だけにとどまりません。あらゆる言語に及ぶ最も普遍的なルールといってよいでしょう。数式が世界共通の言葉であるように、論理もまた世界共通の普遍的ルールなのです。本講義では論理を以下の「４つの言葉のルール」と「４つの言葉の使い方」とします。

- **「でない」という否定**
- **「かつ」という連言**
- **「または」という選言**
- **「ならば」という条件法**

以上の４つの言葉のルールを駆使して筆者は文を書きます。ですから、読者も４つの言葉のルールを理解して読まなければなりません。本講義ではその「ルール」と「方法」を伝えます。

さあ、最先端の現代文講義の開講です。

柳生　好之

受講の際の注意点　効果的な講義の利用法

最高の講義を用意しましたが、ただ講義を受けるだけでは力はつきません。効果的に学習するためにも、この利用法を実践してください。

Ⅰ　予習について

まず一度本文を通読し、「要旨把握」と「意味段落分け」をしてください。そして次に、「設問」を確認してから、「解答の根拠」を本文中に求めてください。最後に、本文中の解答の根拠をもとにして解答してください。

夏期講習では「制限時間なし」でよいのですべての問題に解答して下さい。その際、「解答の根拠とした文」に線を引いておいてください。できれば、「その部分を解答の根拠とした理由」をメモ欄に書いておいてください。

この作業を予習の段階でしておくことで、講義に集中できる仕組みになっています。

予習ポイント　問題を解く。解答の根拠をメモしておく。

Ⅱ　講義について

受講している間は、メモを取らないでください。

ただ見たことをノートに写す、あるいは聞いたことをその場でメモに書くというのは、「頭の中には何も残っていない」状態になりやすいのです。ですから、「復習タイム」に講義のポイントを思い出しながらメモを取ってください。あくまでも「一度頭の中に置いた」上で、「頭の中から取り出す」という作業を怠らないでください。この作業が「文章を読み、解答する」という現代文の解答プロセスのトレーニングになるのです。ただし、本文に線を引く作業は講義中に行ってください。

講義ポイント

講義中はメモを取らない。説明や図は講義後ノートに書く。

Ⅲ　復習について

よく「現代文は復習しなくてもよい」という意見を聞きます。しかし、そもそも「復習しなくてよい」なら、復習して覚えるべきポイントがない「授業」も受ける必要がないでしょう。受験生の貴重な時間をいただくわけですから、本講義は「復習ポイント」も用意してあります。

「復習ポイント」をしっかり覚えてください。これは現代文を分析する上で必要になる考え方です。

復習ポイント	ポイントを覚える。問題を解き直す。

難関国公立大　現代文　目次

第一講　「差異」と「類似」を読む　…… p.8
第二講　「論証」を読む　…… p.26
第三講　「心情」を読む　…… p.44
第四講　「要約」する　…… p.60
第五講　総合問題　…… p.68

第一講　「差異」と「類似」を読む

「否定（でない）」について

「否定」とは対立する概念「補集合」を作り出す言葉です。否定の前後には「対義語」または「対立する内容」がくるということを確認しましょう。

この否定は、「空所補充問題」や「傍線部説明問題」などを中心にどの設問にもからむ可能性のあるもので、論理的読解の一番の基礎になるものです。正確に分析できるようになって下さい。

「否定」のフレームワーク

① A　ではなく　B　である。
② A　よりむしろ　B。
③ A　のようで実は　B。

「差異」のフレームワーク

①　Ａ　は　Ｘ　であるのに対し、Ｂ　は　Ｙ（Ｘでない）である。
②　Ａ　は　Ｘ　であるのとは異なり（とは違って）、Ｂ　は　Ｙ（Ｘでない）である。
③　Ａ　は　Ｘ　であるのとは別に（とは逆に）、Ｂ　は　Ｙ（Ｘでない）である。

※　二者（ＡとＢ）の違いを説明するフレームワーク。

「類似」のフレームワーク

① A は X である。
　また（同様に、それと似て）
　B も X である。
② A と B は ともに X である。
③ A と同様に B も（また） X である。
④ A と B は X という点で同じである。

※「類似」のフレームワークとは、何か（A）と何か（B）の共通点について述べる時に使われるフレームワークです。
※「も」という副助詞や、「また」という副詞に注意すると類似は見つけやすくなります。
※類似を使った比喩を「類比」と言います。
※類似は「アナロジー」「類推」という言い方もあります。

傍線部内容説明問題

「傍線部内容説明問題」とは現代文において、最もオーソドックスな設問です。そしてこれから始まる「各設問別解法」の土台となる「解法」なので、しっかりとマスターしましょう。

その設問形式は次の通り、

傍線部～とあるが、どういうことか　説明せよ。
or
どういう意味か

というものです。この問題に対して常に一定のフォームでアプローチするように心がけましょう。それが「設問解法」であり、現代文で常に高得点をとるための王道です。

では、どのようにアプローチするかというと、次の通り、

傍線部説明問題解法

――「どういうことか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・指示語
・比喩表現
・個人言語

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

※
①「文構造」の分析について

★文法的構造

・主語（主部）―述語（述部）
・修飾語（修飾部）―被修飾語（被修飾部）や目的語（目的格）や補語（補格）など
・接続助詞や連用中止法
・倒置や省略

★論理的構造

・否定　・差異（変化）
・連言　・類似（アナロジー）
・選言　・逆説
・条件法　・因果

※②「ポイント」になる語句について

★　指示語（代名詞）
　指　これ、この、このような、このように、それ、その、そのような、そのように　など
　代　前者、後者、両者、右の、彼　など
★　比喩表現　＝　直喩、暗喩、メタファー、レトリック　など
★　個人言語　＝　筆者が一般的な意味とは異なる特殊な意味で使っている言葉、学術（専門）用語

※③「解答の根拠」となる部分との対応について

★　同値関係
★　対立関係
★　因果関係
★　包摂関係（抽象と具体の関係）

以上の関係がある部分と対応させます。
このような関係で対応した部分が、記述解答を書く際の「解答の根拠」となります。

（次ページより問題演習）

次の文章は、哲学研究者の三浦俊彦が二〇〇五年に執筆したものである。これを読んで後の問に答えなさい。（出題の都合上、本文に省略した箇所がある。）

[注一]ラッセルが標的とした[注二]ヘーゲル的一元論とは、次のような教説である。

「事物が多数存在するというのは、幻想だ。ａとｂという別個のものがあり、その間にＲという関係が成り立っているとする。ａは、〈ｂに対し関係Ｒにある〉という属性を持つ。なぜなら、もしその属性を持たなければ、ａは現実のａでないだろうから。同様に、ｂは、〈ａに対し関係Ｒにある〉という属性を持つ。つまり、どんなものも、他のあらゆるものとの関係を列挙しなければ、それ自身の完全な特徴づけはできないことになる。全体以外のものは、独立して分離するとそれ自身の属性を失ってしまう。よって、個別に分離して存在するようにみえるものたちは真の実在ではなく、究極の一者だけが本当の存在である」

この世界観を信奉しているかぎり、「分析」は不可能だろう。なにしろ、あるものを頭の中で個別に考えただけで、それは既に全体との本来の関係から孤立させられており、真実の姿を破壊されているからである。複雑な

ものを構成要素に区分して、実在の構造と知識の根拠を調べるといった、後年のラッセルの方法は全く使えないことになる。

一元論にとって必要なのは、関係は属性に還元できる、という前提である。つまり、あるものａが他のものとの間に持つ関係は、すべて、ａの内的な属性と同じものだ、という前提である。このような関係をラッセルは「(1)内的関係」と呼ぶ。

内的関係というものはたしかにある。あなたが石につまずけば、あなたは「この石につまずいた」という属性を持つだろう。また、現実にあなたを生んだ母親から生まれた、という属性を、あなたは確かに持つと言うべきだろう。「……につまずく」「……から生まれた」といった関係は、属性に翻訳することができる。それらは内的関係と言ってよい。

しかしたとえば、「富士山より小さい」という属性を、あなたは持つのだろうか。たしかにあなたは、富士山に対して、「より小さい」という関係を持つ。しかしだからといって、「富士山より小さい」という属性が、あなた自身に備わっているのだろうか。

バートランド・ラッセルは、「二〇〇五年二月二日現在、三浦俊彦によって思い描かれている」という属性を持つのだろうか。たしかにラッセルは、三浦に対して、「二〇〇五年二月二日現在、思い描かれる」という関係を持っ

ている。しかしだからといって、「二〇〇五年二月二日現在、三浦俊彦によって思い描かれる」という属性が、ラッセル自身に備わっていたのだろうか。(2)自分が死んだ三十五年も後に、会ったこともない極東の外国人の心に勝手に生じる状態が、ラッセル自身の「属性」であると言えるのだろうか。

　属性には還元できない関係をラッセルは「外的関係」と呼ぶ。外的関係は、内的関係とは異なり、当の対象にとって本質的でないような関係である。内的関係と外的関係の区別は曖昧（あいまい）で、特定の関係がどちらなのかは、直観的に判別するしかないが、いずれにせよヘーゲル主義的一元論は、「すべての関係は内的関係である」と主張している。それをラッセルは「内的関係の[注三]「公理」と呼び、この公理を否定する論証をいくつか提示した。この公理を否定するには反例を一つでも挙げれば十分だろう。あるいは、反例を挙げずに、いかに関係を属性に還元できたとしても必ず(3)別の関係が残る、という一般的な論証で応ずることもできる。ラッセルは、両方の種類の反論を試みた。

　まず、反例を挙げるほうの議論。ラッセルは、因果関係を含まない非対称的関係を反例とする。非対称的関係とは、「より大きい」「より先である」のような、一方向には成り立つが逆方向には成り立たない関係だ。たとえば、ソクラテスはラッセルより先に生まれた。内的関係の公理によると、

ソクラテスは「ラッセルより先に生まれた」という属性Ａを持ち、ラッセルは「ソクラテスより後に生まれた」という属性Ｂを持つ。関係が属性に本当に還元されたのであれば、属性ＡとＢは、関係性を含んでいないはずである。つまり、基本的な日付などによって表わされているはずである。

　しかしそれでもなお、属性ＡとＢのどちらが先か、つまりどちらが先に例示されたのか、という疑問がまだ成り立ちうるだろう（属性が例示されるとは、その属性を持つ存在者が生ずること）。すると、「より先である」という関係がまだ残っていることになる。そこで、属性Ａは「属性Ｂに先立つ」という属性Ｃを持ち、属性Ｂは「属性Ａに先立たれる」という属性Ｄを持つのだ、というふうにして、属性ＡとＢとの間の「先立つ」を属性に還元するとしよう。しかしその場合もまた、属性ＣとＤとはどちらが先なのか、という問いが残ってしまう。以下同様にして、関係はいつまでたっても消去できないのである。

　右の論証は、『数学の諸原理』（一九〇三）でいろいろなバリエーションで提示された。数学では、大小関係や包含関係など、非対称的関係が重要な役割を演ずる。数学にとって関係そのものが不可欠であることを示すのは、ラッセルにとって重要だったのである。

　次に、一般的な論証。こちらは、『ライプニッツの哲学』（一九〇〇）で

試みられた論証である。あるものａが属性Ｆを持つとき、ａがＦを持たないのではなく持つとはどういうことなのか、と問うてみよう。ａとＦとの関係はどういうものか、と。関係をいくら属性に還元しても、属性の持ち主と属性との関係が残ってしまうので、完全な還元は不可能ということになろう。そこで、属性の持ち主と属性とは別のものではなく、同一なのだ、という抜け道が思いつかれる。実際、すべては一者だとする一元論にはこの弁明はふさわしい。

　しかし属性の持ち主と属性が同じというのは、あるものａはそれが持つとされる諸々（もろもろ）の属性すべてと同一だということだが、そのとき、同じａに属するそれら属性どうしの関係はどのようなものだろうか。ａが属性ＦとＧを持ち、Ｈを持たないというとき、ＦとＧが共有してＨは共有しない何事かがあると言わざるをえないが、それこそは「ともにａと同一である」という同一性関係（共属関係）であろう。しかしこれでは、Ｆがａに属するという属性性が、共属という関係性によって基礎づけられることになる。関係は属性に還元されるという一元論の趣旨とは反対のことが正しくなってしまうのだ。

　こうしてさまざまな側面から一元論を攻撃することで、ラッセルはイギリス哲学に多元論的経験主義を回復した。「関係は実在する」「世界には多

数のものがある」という信念を抱くことができるようになったラッセルは、このときの転向を「とても充実した宇宙が与えられた」と喜びをもって述懐している。とくに「関係は実在する」というテーゼは、「関係」「属性」といった「普遍者」の実在を主張するラッセルの[注四]反唯名論のスローガンとなり続けた。

（三浦俊彦『ラッセルのパラドクス―世界を読み換える哲学―』による）

注一　ラッセル＝イギリスの論理学者、哲学者、数学者。

注二　ヘーゲル＝ドイツの哲学者。

注三　公理＝数学・論理学で自明な真理として認められ、他の命題の前提となる根本命題。

注四　反唯名論＝個物のみが存在し、普遍は個物をさす名にすぎないとする考え方を否定し、普遍の実在性を主張する立場。

問一　傍線部(1)の「内的関係」とは何か。「外的関係」との違いをふまえて簡潔に説明しなさい。

問二　傍線部(2)の「自分が死んだ三十五年も後に、会ったこともない極東の外国人の心に勝手に生じる」は、一種の強調表現と考えられる。どういうことを強調したものかを説明しなさい。

問三　傍線部(3)の「別の関係」とはどのような関係か。それを具体的に示した部分を本文中から十五字以内で抜き出しなさい。

問四　本文で紹介されているラッセルによる「内的関係の公理」を否定する議論のうち、反例を挙げるほうの議論の骨子を七十字以内（句読点を含む）でまとめなさい。ただし、「属性」「関係」「還元」という言葉を用いること。

（次ページより解答欄）

問一

問二

問三

問四

第二講　「論証」を読む

Ⅰ　「A↓x」の発見

論証が必要な命題（文）には「A↓x」という飛躍した部分があります。まずは、どこに飛躍があるかを見つけましょう。

①　主語（主部）↓述語（述部）に飛躍がある場合。
②　修飾部（接続部）↓被修飾部（文）に飛躍がある場合。

※文構造（係り受け）を分析する中で、構造的につながっているが、意味的につながっていない部分を探します。
※「x」は、「なぜ『〜』か」というように設問が指定している場合もあります。

Ⅱ　論証部の発見

飛躍を埋める部分が論証部となります。「A↓x」のAの説明を求めましょう。

Ⅲ　「論証」のフレームワーク

①　「単純な論証」　A　↓　B

根拠Aから主張Bが導かれている。

例文　A子ちゃんは美人だ。　　**根拠　A**

したがって、　**導出　←**

私はA子ちゃんが好きである。　　**主張　B**

※実はこの導出に必要な前提として、「私は美人が好きだ。」というものがあります。
これは「隠れた前提」として筆者の論証が成り立つように補ってやる必要があります。
筆者の論証が成り立つように隠れた前提を補うというルールを「**寛大の原則**」といいます。

②「論証の連鎖」　A ↓ B ↓ C

主張Aが根拠Aとなって主張Bが導かれ、その主張Bが根拠Bとなって主張Cが導かれる。

例文　A子ちゃんは目鼻立ちがはっきりしている。　**主張　A　＝　根拠　A**

したがって、　**導出** ←

A子ちゃんは美人だ。　**主張　B　＝　根拠　B**

したがって、　**導出** ←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張　C**

※この形が「論証」の中では一番多いです。「論証」の最後に来る文が「主張提示文」になります。
その前の文は「根拠」となります。

③「結合論証」

B ＋ A
↓
C

主張AとBが組み合わさって一つの根拠を形成し、主張Cが結論付けられる。

例文

A子ちゃんは美人だ。	**主張A**
＋　結合	＝ **根拠**
私は美人が好きだ。	**主張B**

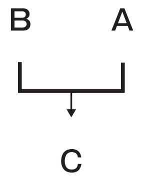
したがって、 **導出** ←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張C**

※25ページに説明した「隠れた前提」がある場合、この「結合論証」となります。
この形も「理由説明問題」ではよく出題されます。

※「Aのみ」「Bのみ」の解答は減点されます。

④「合流論証」



根拠Aだけでなく根拠Bもあり、主張Cが導かれる。

例文　A子ちゃんは美人だ。　**根拠　A**

また、

A子ちゃんは性格もよい。　**根拠　B**

したがって、　**導出**　←

私はA子ちゃんが好きである。　**主張　C**

※この場合はどちらか片方だけでも「根拠」になります。
設問の場合には「理由を二つ説明せよ」となることが多いです。

傍線部理由説明問題

傍線部の問題の２大パターンが前回の「傍線部説明問題」と今回の「傍線部理由説明問題」です。ではまずその形式から確認しましょう。その設問形式は次の通り、

傍線部～とあるが、なぜか　　説明せよ。
or
その理由を

というものです。この問題に対してもやはり一定のアプローチの仕方があるので、今回はその設問解法を学びましょう。

傍線部理由説明問題解法

―「なぜか」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
・文法的構造
・論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
・A→×
（飛躍している部分）

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。
・Aの説明
・「論証」のフレームワーク

（次ページより問題演習）

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

失われた十年からまだ完全には抜け出せない二十一世紀初頭の日本。今、豊かさを謳歌（おうか）する気分にはなれないでしょうが、百年という長い時間の尺度で見れば、日本は疑いようもなく豊かになりました。しかも、日本は豊かになっただけではありません。A百年前に比べて、おカネそのものが安くなったのです。

このようなことを言うのは、最近夏目漱石の『野分（のわき）』を読み直したからです。一九〇七年、ほぼ百年前の作品です。

『野分』の主人公は二人の男です。一人は大学を出たばかりの無職で肺病病みの「高柳君」。もう一人は孤高の文学者「白井道也」。道也はもと地方の中学校教師でしたが、その町を潤す石油会社の金権主義を批判してクビになった過去があります。

二人は同じ問題を抱えています。それは大志はあるのにおカネがないという問題です。二人がもっとも目の敵にするのは三菱（みつびし）財閥の創立者「岩崎」。二人が出会う道にも「岩崎の塀が冷酷に聳（そび）えて」います。

「岩崎の塀を三度周（まわ）るといい散歩になる」。そう言うのは、道也です。高柳君は若いから過激です。「岩崎の塀などを見ると頭をぶつけて壊してや

りたくなります」

道也は応（こた）えます。「そんな愚な事を云（い）わずに、正々堂々と創作なら、創作をなされば、それで君の寿命は岩崎などよりも長く伝わるのです……岩崎の塀なんか何でもない。ハハハハ」

「岩崎の塀なんか何でもない」というのは、まさに、「岩崎」がふつうのヒトには乗り越えることができないおカネの力を象徴するがゆえのせりふです。しかも、大著述のみに可能な永遠の寿命をもってしか、「岩崎」の寿命を越えることはできない。「岩崎」は未来永劫（えいごう）不動のもののように思われているのです。

なぜこの時代「岩崎」という固有名詞が過剰な意味をもっていたのか。それは「岩崎」＝三菱が産業資本主義時代のおカネのありかたを象徴するものだったからです。

十八世紀後半の英国から始まった産業資本主義の時代とは、機械制工場による大量生産の時代でした。そしてその時代はおカネがヒトを支配した時代でした。

おカネがなければ「岩崎」を呪（のろ）っているしかない。しかし、「岩崎」のように[B]<u>おカネさえあれば、必ず利潤を上げることができた。</u>おカネはふつうのヒトの手には届かないが、万能であったのです。

資本主義においておカネで買えないモノはありません。おカネさえあれば、誰(だれ)でも機械制工場を持つことができます。そして、産業資本主義の特徴は、機械制工場さえ持てば必ず利潤が上がったということにあります。

利潤とは何か。それは製品からの収入と、製品を作る費用との差です。

会社が機械制工場による大量生産で大きな収入を得ても、同時に費用が上がってしまえば、元も子もありません。ところが、産業資本主義時代においては、機械制工場さえ持てば必ず利潤が得られる仕組みが隠されていたのです。農村における過剰な人口の存在です。会社は都会に大量に流出してくる人々をいくらでも安い賃金で雇えますから、費用を低く抑え続けることができたのです。

二十世紀の後半、先進資本主義国に異変が起こります。農村からの人口流出が止まり、都会で働く労働者の賃金があれよあれよと上がり始めたのです。その結果、収入と費用の差が縮まり、縮まるにつれ、会社は機械制工場を持っただけでは利潤を確保できなくなったのです。産業資本主義――おカネの絶対的な力の終焉(しゅうえん)です。

繰り返しますが、利潤とは収入と費用の違いです。他社と同じ製品しか作れないならば、異なった技術を導入して費用を下げなければならない。他社と同じ技術しか使えないならば、異なった製品を作って収入を高めな

ければならない。会社はこの時から横並びの大量生産を止め、違いを意識的に創っていかなければ利潤を生むことができなくなりました。

しかも違いは簡単にまねられる。一つの会社が新しい技術や製品を開発しても、すぐに追随されてしまいます。違いとは、一度創り出してもおしまいにはならない。まねされるたびに、いや、まねされる前に、新たに創り出し続けなければならないのです。その結果どの会社も、新しい製品や新しい技術をつねに開発し続けていかなければ、市場のなかで生き抜いていけない。

これが、現在進行中のポスト産業資本主義にほかなりません。

いうまでもなく、このような違いを意識的に創り出すことができる唯一の存在は、ヒトです。他と違った技術や製品を開発できる能力や知識をもった従業員や技術者や経営者こそ、ポスト産業資本主義における利潤の源泉になったのです。

そのときヒトは、モノとしてのヒトから、本来の意味でのヒトとなったのです。

農村から都会へ人口の流出がなくなった事実は労働者の賃金を高くしました。だが、賃金とは、一人のヒトを別のヒトと代替可能なモノであるかのように買うための費用でしかありません。ところが、その賃金というモ

ノの値段が上がることによって、産業資本主義はその存在基盤を失い、ポスト産業資本主義へと移行せざるをえなくなった。それは、モノとしてのヒトではなく、モノに還元できないヒトとしての能力や知識を利潤の源泉とせざるをえなくなったということです。

おカネで買えないモノはありません。だが、幸か不幸かヒトはモノではありません。ヒトに自由意思がある限り、その頭脳の中の能力や知識をおカネで買うことはできないのです。

おカネが安くなったということの意味がここにあります。

ポスト産業資本主義の時代とは、世間常識とは逆に、まさにおカネの力が大きく低下した時代なのです。だからこそ、おカネはわずかでも利ざやを稼ぐために、様々な金融商品に変身し、世界中の市場を飛び回らざるをえなくなったのです。それが金融革命であり、グローバル化なのです。資本主義の歴史の中で今ほどおカネが安くなった時代はありません。『野分』に出てくるC「岩崎の塀」が、ふと気がつけば崩れ始めていたのです。

ポスト産業資本主義における最大のおカネ持ちは、マイクロソフトのビル・ゲイツ氏です。だが、D「ゲイツの塀」は、憧(あこが)れやからかいの対象にはなっても、呪いの対象になることはまれです。

産業資本主義の時代にはカネ持ちであることがカネ持ちになることの条件でしたが、ポスト産業資本主義になると、カネ持ちであることは、違いを他よりも早く生み出すことに成功したことの結果でしかないからです。しかも[E]今はマイクロソフトですら未来永劫不動な会社だと、だれも思っていない。ヒトの頭にある能力や知識をうまく利用できなくなれば、昨日は何百億ドルの利潤を上げている会社でも、明日はたちまち消えてしまっても不思議ではありません。

誰もがゲイツ氏になれるわけではありません。だが、おカネがないからといってマイクロソフトを興せないわけではない。ポスト産業資本主義時代とは、おカネはないが大志だけはある高柳君や白井道也のようなヒトが、そのまま朽ち果てていかなくても良くなった時代なのです。いや、「人類のため」を志している白井道也が高柳君とチームを組んで非営利会社を興し、[注]リナックスのようにマイクロソフトに挑戦することすらできる。

実は『野分』は、百円というおカネをめぐって将来あるヒトが自分の命を縮めざるを得ないという物語です。残念ながら、当時としても傑作とは言われませんでした。

（岩井克人「すべてはヒトに始まる」〈『日本経済新聞』二〇〇五年八月二九日朝刊掲載〉による）

（注）リナックス――無料で公開されているコンピュータの基本ソフト。

問一　傍線部Ａ「百年前に比べて、おカネそのものが安くなったのです」とあるが、どのような意味か。筆者の考えに即して、百三十字以内（句読点を含む）でわかりやすく説明せよ。

問二　傍線部Ｂ「おカネさえあれば、必ず利潤を上げることができた」とあるが、なぜ「利潤を上げることができた」のか。筆者の考えに即して、四十五字以内（句読点を含む）でわかりやすく説明せよ。

問三　傍線部Ｃ「『岩崎の塀』が、ふと気がつけば崩れ始めていた」とあるが、これと同じ意味を端的に表す語句を本文中から十二字（句読点を含む）で抜き出して示せ。

問四　傍線部Ｄ「『ゲイツの塀』は、憧れやからかいの対象にはなっても、呪いの対象になることはまれです」とあるが、なぜ「呪いの対象なることはまれ」なのか。その理由を三十五字以内（句読点を含む）でわかりやすく説明せよ。

問五　傍線部Ｅ「今はマイクロソフトですら未来永劫不動な会社だと、だれも思っていない」とあるが、なぜ「マイクロソフトですら未来永劫不動な会社だと」思われないのか。その理由を五十字以内（句読点を含む）でわかりやすく説明せよ。

（次ページより解答欄）

問一

問二

問三

問四

問五

第三講　「心情」を読む

「文芸的文章」である「小説文」や「随筆文」には登場人物や筆者の心情を把握する問題があります。今回は「心情」のとらえ方を学びましょう。

Ⅰ　単純な心情

原因　→　心情　→　結果

※　心情把握問題の基本形です。

※　この場合は心情が書いてないことが多いため、原因と結果から推測して心情を把握する問題になっていることが多いです。

Ⅱ　心情の変化

原因Ａ　→　心情Ａ　→　結果Ａ　→　原因Ｂ　→　心情Ｂ　→　結果Ｂ

※　心情把握問題で一番有名な問題です。

※　心情Ａから心情Ｂへの変化、そして変化の原因を三点セットで捉える必要があります。

Ⅲ　結合原因の心情

原因A
＋
原因B
→ 心情 → 結果

※　原因Aだけ捉えて答えようとすると間違いになります。

※　原因Bは **「リード文」「会話文」「心中文」「過去シーン」** などにある場合が多いです。

Ⅳ　心情の交錯

原因A　→　心情A
　　　　　　　＋　→　結果
原因B　→　心情B

※　分析が一番難しい問題です。

※　心情Aの原因が原因Bになっていたりと、原因の部分を入れ替えての誤答選択肢が多いです。

心情把握問題解法

―「心情」の解答プロセス

①「文構造」を分析する。
- 文法的構造
- 論理的構造

↓

②「ポイント」を把握する。
- 原因　→　客観的事態や主観的事情
- 心情　→　⊕心情や⊖心情
- 結果　→　行動や反応や発言

↓

③「解答の根拠」となる文と対応させる。

（次ページより問題演習）

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

私の脱いだ靴下やワイシャツを「くさい」と娘が嫌うようになったのは、いつごろからだったろう。小学校の高学年あたりだろうか。いまでは私自身が「くさい」らしく、朝寝をした日曜日にパジャマ姿のままリビングに姿を見せると、しかめつらで「パパ、マジ、くさい。シャワー浴びてきてよ」とも言われてしまう。

「こら、そんなこと言わないの」と娘をたしなめる妻も、最近、少し心配そうに「口臭（こうしゅう）がキツくなってるわよ。歯周病（ししゅうびょう）とか、あと、胃が悪いんじゃないの？」と言う。新聞や雑誌で加齢臭（かれいしゅう）という言葉に目が留まるようになったのも、ここ数年のことだ。

においというのは、距離が近いからこそ感じ取ることができる。手紙や電話やメールなどでは伝えられない。そう考えてみると、たとえ妻や娘には嫌がられてしまうにおいでも、それを嗅（か）げる近さにまだ家族がいてくれるということを喜ぶべきなのかもしれない――負け惜しみの屁理屈（へりくつ）だと笑われてしまうだろうか。

それでも、私は思うのだ。思春期になった娘が、そしてやがて息子もきっと、父親のにおいを嫌ってしまうのは、においそのものではなく、家族の

距離の近さを拒（こば）みたいからではないのか。

　私もそうだった。娘よりもっと早く、小学一年生の三学期に入った頃（ころ）から、たった一人の家族のにおいを嫌うようになった。

　母のにおいは、工事現場の土のにおいだった。

　母は鏡台を持っていなかった。洗面所に置いてある数少ない化粧品も、母が鏡に向かってそれを使っているのを見たことはほとんどない。

　私は友だちの家に遊びに行くと、さりげなく――ときには友だちの目を盗んでこっそりと、お母さんの鏡台に近づくのが常だった。豪華な三面鏡のドレッサーというわけではなくても、そこには化粧品のガラス瓶が並んでいる。香水や頬紅（ほおべに）や口紅の香りが、うっすらと漂っている。それを嗅ぐと、なんともいえない華やいだ気分になる。鼻腔（びこう）の奥が甘いもので満たされる。(1)お母さんのにおいだ。うれしくなって、寂しくなって、頬がゆるんで、うつむいてしまう。

　父親の記憶がないせいだろうか、友だちのお父さんへの憧（あこが）れやうらやましさはなかった。むしろ母と友だちのお母さんとを比べて、一人で負けを背負い込んでしまうことのほうがずっと多かった。

　夕方になって家に帰っても、母は陽（ひ）が暮れきるまで工事現場で働いてい

る。がらんとした部屋には母の置き手紙がある。洗濯物を取り込んでおくように、風呂（ふろ）に水を張っておくように、宿題は晩ごはんの前にすませるように……。軒下（のきした）に干してある洗濯物の中には、母が仕事のときに使うタオルもあった。どんなに洗っても繊維（せんい）の中にもぐり込んだ土の汚れは落ちきらず、使い古しのタオルはいつも黒ずんでいた。風呂に水を張るときも、最初に浴槽（よくそう）をよく洗わないと底に沈んだ土が混じって、水が濁（にご）ってしまう。

　手伝いをすませて宿題をしていると、やがて鼻がひくひくとしてくる。意識してそうしているわけではないのに、部屋に染（し）みついた土のにおいを鼻が嗅ぎ取ってしまう。そんなとき、私は決まって、友だちのお母さんの鏡台のにおいを思いだした。鼻腔の奥にまだかすかに残っているはずのお母さんのにおいを、もう一度取り出したくてしかたなかった。

　空がすっかり暗くなった頃、母が帰ってくる。ばたばたと家に上がって、「ごめんなあ、すぐにごはんにするけんなあ」としわがれた声で言いながら洗面所に向かい、水を勢いよく流して、土埃（つちぼこり）と汗にまみれた手や顔を洗う。洗顔料など使わない。化粧水をつけるわけでもない。ミカンのネットに入れた固形の石鹸（せっけん）を手のひらにこすりつけるように泡立てて、手を洗い、顔を洗って、またばたばたと台所に駆け込んで、服も着替えずに夕食の支度に取りかかる。

留守番の寂しさから解放された私は、流し台の前に立つ母にまとわりついて、今日一日の学校でのできごとを事細(ことこま)かに話していく。母は手を休めることなく、ふうん、ふうん、と相槌(あいづち)を打ってくれる。だが、仕事がキツかった日や、私には言えない悲しさや悔しさを胸に溜(た)め込んでしまった日には、その相槌が間遠(まどお)になってしまう。面倒くさそうに話を切り上げたがることもある。二人きりの家族は、おしゃべりがぎこちなくなったときにとりなしてくれるひとがいない。母の疲れを察して静かに過ごすには、私はまだ幼すぎたし、留守番の時間はほんとうに寂しくて不安だったし、なにより——私は、母のことが、好きだったのだ。

　母の相槌がそっけなくなると、私は急に落ち着かなくなってしまう。虚(こ)空(くう)をさまよいはじめたまなざしは、母のモンペのお尻(しり)にこびりついた土の汚れを見つけてしまう。洗面所で洗いそこねたうなじの汚れを見つけてしまう。好きなのだ。母のことが大好きなのだ。お母ちゃん、お母ちゃん、と心の中で呼んだだけで胸がじんと熱くなってしまうぐらい好きなのに、母が友だちのお母さんに負けているところばかり探してしまう。

　においがする。土のにおいが狭い台所にたちこめる。

「はい、お待たせえ、できたよお」

母がつくる夕食にも、土のにおいは染みている。

母は学校が〈注〉半ドンの土曜日にも現場に出ていた。工事が遅れると、週末の夜中に突貫作業（とっかんさぎょう）をすることも多かった。

そんな日は朝から憂鬱（ゆううつ）だった。夕方の留守番だけでも心細いのに、一人で夜を過ごさなければならない。友だちの家に泊まりに行かせてもらいたかった。せめて夕食のときだけでも、誰（だれ）かと一緒にいたかった。「晩めし、食うていけばええがな」と言ってくれる友だちはいたし、お母さんから誘われたこともある。だが、母は決してそれを許してくれなかった。「そげなことしたら向こうに迷惑じゃけん」と、誰にも迷惑をかけないということに依怙地（いこじ）なほどこだわっていた。女手一つで息子を育てる母なりの意地だったのだろう。いまならわかる。ほんとうは、あの頃も、うっすらとわかっていたのだと思う。(2)わかっていたから、すねた。友だちのお母さんに負けてしまうのが怖いから泊まりに行かせてくれないんだ、と決めつけた。

一人で夜中まで留守番をする私に、母はおにぎりの弁当をつくってくれた。ふつうにご飯を弁当箱に詰めるのではなく、出がけの忙（いそが）しさのなか、梅干し、昆布、かつおぶしと具を一つずつ分けたおにぎりをつくってくれた。ほんの少しでも食事時の寂しさをやわらげようとしてくれたのだと、

いまならわかる。あの頃もわかっていた。わかっていたのに、私はいつも、おにぎりを食べ残していた。

土のにおいがするのだ。土のにおいの染みた手でご飯を直接握っているから、おにぎりも土のにおいにまみれている。嘘（うそ）だ。そんなことがあるはずがない。だが、(3)私の鼻は――幼い心は、確かにそのにおいを嗅いでしまったのだ。

いつもおにぎりを食べ残す私に、母はけげんそうに「もうおなかいっぱいなん?」と訊（き）いた。最初のうちは適当なことを言ってごまかしていたが、やがて母は心配顔で「体の具合、悪いんと違う?」と訊くようになった。その顔を見ていると、申し訳なさがつのる。ごめんなさい、お母ちゃん、ごめんなさい、と心の中で詫（わ）びながら、私は言った。

「お母ちゃんのおにぎり、くさい」

きょとんとする母から目をそらして、「土くさいけん、食えん」とつづけた。

母は自分の手を見て、必死に気を取り直すように、「お母ちゃんは、いつも手を洗うとるよ」と笑った。

「それでも……くさい」

「なに言うとるん」

「くさいもんは、くさいけん、食えん」

母はそのとき怒ったのだろうか。泣いたのだろうか。悲しそうに微笑(ほほえ)んだのだろうか。記憶はあやふやだった。たぶん、逃げるようにして忘れてしまったのだろう。

それが、冬の終わりのことだった。

（重松清『よもぎ苦いか、しょっぱいか』による）

〈注〉半ドン＝午後が休みの日のこと。

問一　傍線部分（1）「お母さんのにおいだ。うれしくなって、寂しくなって、頬がゆるんで、うつむいてしまう」とあるが、なぜ「私」はこのように悲喜こもごもの思いにとらわれているのか、説明せよ。

問二　傍線部分（2）「わかっていたから、すねた」とあるが、（イ）何を「わかっていた」のか、（ロ）なぜ「すねた」のか、それぞれ説明せよ。

問三　傍線部分（3）「私の鼻は――幼い心は、確かにそのにおいを嗅いでしまったのだ」とあるが、その理由を説明せよ。

問四　波線部分「においそのものではなく、家族の距離の近さを拒みたいからではないのか」とあるが、それはどういうことか、「娘」と少年時代の「私」のエピソードを踏まえて、説明せよ。

（次ページより解答欄）

問一

問二

（イ）

（ロ）

問三

問四

第四講　「要約」する

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

よく、学問は疑いから始まるといいます。だから万事疑うことが重要だと。その通りです。決して間違っていません。だが正しいことが間違って受け取られて大違いのもとになることもある。学問的発見の創造現場に立ってみると、疑いの前にというか疑いの底に信ずるという行為があって、その信の念が「疑い」を創造に生かしている。そういう仕組みになっているので、その面の理解を欠いて言葉だけを受け取ると、正しくはあっても肝心の創造、ささやかながらも自分でものを見、一個の自由な人間として何かを創ってゆくには役立たぬ空語になります。

新しい学説の生誕という、大状況での学問的事件の場合でも、およそ創造の現場に立てば同じで、それについても後に申し上げるつもりですけれども、大学者の大学問創造に関する大議論は別として、お互い「本を読む」という当面の実際問題としても、いったい、本は、最初から疑いの眼で接して読めるんでしょうか。試しにちょっと、――仮説的に私を信じて――

考えてみて下さい。「学問は疑いから生れる」という真理を呑みにして、役立たぬ形でもたれかかっていたなあ、と気づかれるかも知れませんよ。

古典は一読明快ではない。深く、踏みこんで読まねばと、さきほど申し上げました。古典の真髄、古典の古典たるゆえんは、踏みこんで、深読みして――本文との格闘をくりかえして――初めてわかる。それは御了解いただいたと思いますが、しかし、信じてかからなきゃ踏みこめないじゃないですか。「適当に」しか読めない。疑い深く白眼視しながら踏みこんで本文と格闘するなんてことはできない。それ自体矛盾しています。いわんや、分らぬところを二度三度、時間をかけて根掘り葉掘り深読みの労を払うなど、馬鹿馬鹿(ばかばか)しくってできるわけないですね。何か期して待つところがなきゃ。信ずるところがあって初めて、読み深めの労苦が払える。

も少し、さしあたって手ぶらで考えられるかぎりで問題を煮つめておきましょう。いま、ちょっと見たように、信ずることがなければ読み深めの労は出てこないが、それよりもまず、労を払って解くべき問題・事実そのもの――解読すべき本文の字句――が、信の念がなければハッキリした形で目に映ってこない。

たとえばAさんの本を読んでいて、おかしいなと思うとき――あるいは思うところは、誰にもいっぱい出てくると思いますよ。

ここでAさんがいっていること——事実あるいは解釈——は、私の了解しているところと違っている、おかしいなとか、ここにはこう書いてあるけれど、たしか他のところでは別のことをいっていたと思うがなあとか、あるいは、つじつまの合わんこと、あるいは関係のないことが同じこのパラグラフのなかにあるとか。その他、多少読みつけてくると、段落と段落あるいは章と章との関係ですね、さらには全体の編別構成。そのかかり結び——と私は名づけています。コンテクストとかテクスチュアといってもいいでしょう——がハッキリつかめないとか。要するに文章解読法の鍵になる（かも知れん）いくつかの箇所ですね、具体的な。

　文章についてそういう事実（と思われるもの）の発見があり、そこに何故という疑問がおこる。そして、その疑問を解くための探索が始まる。それはそうなんですけれども、その「事実に対する疑い」が、現実に、ある具体的な事実に対するはっきりとした形の「疑い」として読み手に提起され、その「疑い」を解明するための労苦を要する行為に結実してくるためには、その（疑いの）底に信ずるという情念・信の念が働いていなければならないでしょう。一つには、ここにはたしかに私にこう読めることが書いてあるけれど、それはどうしても変だという、自分の読みに対する信の念が。そしていま一つ。Aさんほどの人が出たらめを書くはずがないとい

うかたちでの、著者に対する、これまた信の念が。

この二つの面での信念に支えられて初めて、疑問が、ある事についてのハッキリした形の疑問として起り、それを解くための苦渋にみちた探索が始まり、また持続するわけです。事実を執念深く確かめてゆく操作のなかで、この二つの面での信念も、それぞれに確かめ直されて中身も変ってくるわけですけれども、それにしても、あらかじめ、端緒において、漠たる形であれ、行為へと人をうながさずにおかぬ強烈な信念がなければ、読み深めの行為どころか、そもそも解明すべき事実なるもの――ここにこう書いてあるがそれは変だというそれですね、さしあたって――すら、ハッキリした形では浮かんできません。何となく変だという感じで終ってしまう。

漠然たる疑いは、そのままでは解きようがない。問題が、解明を要する問題としてハッキリとした形で読み手に提起されてくるには、そもそもまず、端緒において、この両面でのそれぞれに深い信念があることを前提にしています。

自分の読み――あるいは読むときの自分の感じ――に対する信念だけあって、はずという、著者らしい著者としてのA氏に対する信の心が無ければ、本文の字句に対する具体的な疑問がかりに起ったとしても、その疑問は、ミスプリか思いちがいだろう、といったかたちで、本文に勝手な改

訂を加えて安直に読むことで、解消してしまうでしょう。熟読・熟考によって解明すべき箇所・具体的な事実そのものが、消えてしまう。自負——じつは他者一般に対する浅信——からくる本文の読みとばし・粗読です。

もっと粗雑に、一読明快に目に映るかぎりで読みとばしてなんらの疑問も生じない無神経な人も多いですけれども、それでは本を読んだことにはなりませんね。本文の一字一句に神経をくばって精読し、おかしいとおもわれる箇所のいくつかを発見してその鍵を解こうとするのは、もともと、「はず」というA氏あるいは「A氏ほどの人」への、さらにいえば、A氏もそれに属しているはずの著者らしい著者というものに対する信念が心に働いているからです。駄本ばかり読んでいると、こういうくせが身についてしまいます。本とは「適当に」読み流すべきもの。

他方でしかし、これとは反対に、著者への信だけあって、自分の読みに対する信念がおよそ無ければ、あるいは、本を信じて自分を抛棄（ほうき）してしまっては、これまた精読はできない。本文を隈（くま）なく精読し読み深める労を払って自分の見たところ、自分の疑惑を確かめ、隠された内実に到達してその本を自分の古典として獲得する創造的読書への道は、ここでもまた、閉ざされてしまいます。「適当に」しか本が読めない。

疑問が出ないというよりも、そもそも、それを疑問として執拗（しつよう）に探索を

してゆくべき事実そのものの発見と確認ですね、ここにはこう書かれている（がそれはどういうわけだろう）という事実が、はっきりとした形で自分の目に映り、確認されてこない。

　愛読者といわれる人のなかには、むしろファンというべきでしょうが、Ａ氏一辺倒で、Ａ氏のものといえば――Ａ氏のものだけは――我を忘れて読みふける人もありますけれども、こういう読み、著者にもたれかかって己れを捨てた耽読（たんどく）は、深読・精読に似て然（さ）に非ず。盲信からくるこれまた一種の読み飛ばし行為つまり本質的には粗雑な読みであって、一字一句本文を精読し、謎を含む（と思われる）ところを見出してその鍵を解く労苦に満ちた「賭け」を重ねてＡ氏の真髄にいたる道ではありません。

　深いところで著者を信じることは必要ですが、自分を捨てて著者にもたれかかっちゃいけない。その時その時の自分の読みをとにもかくにも信じてそこに自分を賭ける。という行為（のくりかえし）がなければ、Ａ氏の本が名著であるゆえんをこの眼で確認し、自分の古典として獲得することは、何回くりかえし読んでも不可能です。

　こういう、読む人自身への信と忠誠を欠いた「盲信からくる粗読」は、その意味で非生産的ですが、それだけじゃない。愛読者としての著者への信の面でみても、こういう読書態度は、Ａ氏を、深いところで信ずるとい

うよりも、むしろ、著者らしい著者、信を寄せるに足る人間の一人として見ていないことを、つまるところ本当にはA氏その人に対する人間的信頼が欠如していることを意味する、といっていい。まともにぶつかってゆくことに危惧を感じる。曖昧模糊としたままに置くことによって保たれねばならぬような「信頼」関係。それは信頼関係とはいえますまい。

　以上二つの面での信念に支えられて念入りに、注意深く事実を見るという行為があって初めて、「疑い」が現実に学問的探求の母となるのであって、その裏打ちがなければ、疑いは、漠然とした、消極的で不毛なフィーリングに終って、本文解読の積極的な活動を生む源にはなってきません。

（内田義彦『「読むこと」と「聴くこと」と』による）

問い　右の文章を要約しなさい（二〇〇字以内）。

第五講　総合問題

次の文章を読んで、問一～五に答えなさい。

サルトルがいうように、己れの身体は、自ら牛耳ることのできない他の主観にとらえられるのであり、その理解と意味づけの点で、自身から逃げ去り他者に掌握される(a)ウき目にあう。すれ違う誰かが自分の体に視線を固定させただけで、私たちはファスナーや衿(えり)をチェックし、気の許せる相手に服装の適否をたずねたりする。身体は、他者の注意や評価の対象となりうる点において、私たちの意識を攪乱(かくらん)し不安にさせる。

〈装う〉者は、この測り知れぬ他者の視線に自らをさらす。この「可視性」の空間がどれほど自己を揺るがすとしても、人はそれと絶縁することはできない。自己が、まさしく他者との関わりの中で問いとして立てられ、追求されるものである以上、それは、「見る／見られる」といった可視性の関係空間から(b)ツムぎ出されるよりほかはない」のである。私たちは、逃れようのない「可視性」の空間の中で、自己の存在が他者に牛耳られないように、自らの身体の見え方とその印象を統御する試みへと乗り出さざるを

えない。

キャミソールやピッタリしたパンツを身につけるとき、しばしば人はこの課題を背負い込む。自身の了解と意図にはおかまいなしに、自由に関心と意味づけを膨らませる他者の意識にとり囲まれること、それは、自身の存在が他者によって塗りかえられ、浸食されるような不安を生じさせる。そのとき〈装う〉者は、他者の注目を誘う媚（こ）びた雰囲気ではなく、性的な関心を払拭（ふっしょく）する快活さや、他者の視線をすりぬけるナルシシズムをかもしだそうとする。それは、得体の知れない視線を前にして、自らの身体に対する関心と意味づけを誘導・制御し、自身の存在を掌握しつづけようとする自己所有の試みなのである。

(ア)<u>〈装い〉は、他者の視線を前にした身体的存在の危険を、減殺または回避する防衛の戦略である</u>。だが危険は、他者の視線の「暴力」だけに起因するわけではない。問題の核心は、自己と他者の意識の溝にある。近づいてくる知人が挨拶（あいさつ）をするタイミングで、私が傍で動く影に目を落とすなら、知人は私に「他意」を嗅（か）ぎとるだろう。身体のありようは、他者に対する私の関係態度を表わす〈身ぶり〉として読みとられる。この〈身ぶり〉を誤るとき、私たちは、他者からの敬遠や拒絶に出会うことになる。身につけるものも、身体のジェスチャーを構成する限り、このような危険と無

縁ではない。

初めてのデートに、すり切れたジーンズとネックの伸びたTシャツでのぞむなら、相手の反発と嫌悪はまず避けがたい。〈装い〉は、他者への態度を表わす〈身ぶり〉として、他者の承認がえられるように、あるいは他者の反発を回避できるように、整えられねばならない。だがこの承認は、〈装い〉の美的な価値に関する評価を意味するわけではない。いかしたストリート・ファッションも、就職の面接の「勝負服」にするなら、承認をうるどころか、むしろ警戒の意識を喚起してしまうのである。

私たちが、「異様な」、あるいはひどく崩れた服装の人を、とりあえず慎重に観察するのも、こうした警戒の意識による。つまり、ここで承認の成否を分かつのは、自らの〈装い〉が他者の判断に委(ゆだ)ねられることを自覚し、自己の安全と他者からの尊重を確保するために、他者との応答関係を引きうける構えの有無なのである。問題は、〈装い〉の具体的内実に対する肯定的評価ではなく、他者との応答関係を引きうけようとする関係態度の共約性にほかならない。毎日の身支度で私たちは、他者からの承認と社会的主体としての資格を維持する戦略をめぐらしている。この意味で〈装い〉は、他の主観との溝に落ち込む危険のある自己の存在を、他者に受容される身体へと転成する〈身なり〉なのである。

承認の戦略としての〈装い〉は、身体が自己に関する他者の認識と了解の対象になることから要請される〈身ぶり〉の一部であり、他者を前にした〈身のふり方〉である。それは、既定の所与としての肉体を被(おお)う外的な装飾ではなく、「社会的環境に私たち自身を提示するさいに身体をまとうやり方」であり、一つの「ボディー・テクニック」にほかならない。そしてまさに、この「身体をまとう」テクニックの要請によって、身体が装われるべきもの、成形されるべきものとされ、人為的な操作に服することになるのである。〈装い〉が身体であるだけでなく、身体そのものが〈装い〉でもあることが(c)メイキされねばならない。

この戦略は、必ずしも、リクルート・スーツのような画一性を追求するものではない。自分の太腿(ふともも)が流行の細身のパンツにあわないときに、縫い目を広げて横シワいっぱいで身につけるのは、他者の印象を意識できていないことの証(あかし)となってしまう。むしろ、あたかもモードに無関心であるかのように、体型にあったありふれた〈装い〉をそつなくこなすほうが、他者の評価と判断を意識した主体性をアピールできるともいえるのである。

承認の戦略としての〈装い〉の核心は、他者に対する自分の身体の見え方を反省的に自覚し、それを自ら意識的に統御する主体性をディスプレイ

する点にある。そこには、他の主観を前にして己れの存在を安定的に確保するために、他者に通用する〈身なり〉を自己統制しようとする自律的な自己の構えがある。だが、誤解してはならない。それは、〈装う〉行為に先行して存在する自律的な自己が、その内的な基準に合致するように〈装い〉を統制するということではない。そうではなく、〈装い〉をめぐる自律性の追求とは、他者の印象と評価を引きうけ、それらに呼応する社会的主体性を獲得することにほかならない。いいかえれば、〈装う〉者は、他者との応答関係を通じて、そしてその中でのみ、自身の存在を自らささえる自己となりうる。〈装う〉自己は、他者に呼応して〈装い〉を反省的に選択・形成する行為のそのつどの態勢として、行為の中でのみ生成し、示されるものなのである。〈装い〉は、たんに自らの身体的存在を統御しようとする「自己に関する所有」の戦略であるだけでなく、(イ)〈装う〉者が他者を前にして自己となり、自己として存立してゆくという意味で、「自己を所有する」戦略でもあるといえよう。

　ファッションを通じた自己所有の戦略は、成功を約束されていない。それは、他者との溝を前にした、主体の危うい サヴァイヴァルの企てであるほかない。しかも、現代の〈装い〉は、目まぐるしく財が変化・増殖し、

その動向が広く情報化されるシステムの中にある。こうした消費文化の中で、自己所有を追求する個々人は、一つの逆説に直面する。

　この逆説を理解するさいにもっとも重要なのは、ファッションを一つのコミュニケイションとしてとらえる視点である。すでに確認したように、〈装い〉は、私たちが社会的な承認をめざす戦略であり、体を保護し「隠す」営みであるだけでなく、コミュニケイションの企てなのである。確かにそこに、言語のような確定的な文法や広い共通了解の存在を見ることはできない。だが、少なくともそれは、「……ではない」という程度の相互理解を成立させる形象的な情報を伝達するかぎりで、一つのコミュニケイションなのである。

　このコミュニケイションは、現代の消費文化の中では、しばしばモードの形態をとる。ファッションを追求する者は、あたかも現在を生きていることの証を求めるかのように、ある基本的なスタイルや色づかいやアイテムを共有し、その変動のサイクルをともにする傾向をもつ。ファッションは、他者の〈装い〉を理解し、それに応答しうる自己を、社会的主体として認知させようとする、相互承認のコミュニケイションなのである。

　かりに、ファッションがこうした同調機制だけを特徴とするのなら、それは、自己やアイデンティティの存立に関わる現象とはならないだろう。

だがモードには、「限界的な差異化」を通じた独自性の提示という、もう一つの原理が内在している。「モードは、社会的な均等化を追求する傾向と、個性的な差異と変化を追求する傾向とを、一つの統一的な行為において重ねあわせる、多数の生の形式の中の特殊なものにほかならない」（G・ジンメル）。ローライズの流行を踏まえながら、色目やラインに差異を与え、どこにでもあるようなスタイルとの差別化を追求するふるまい。この「差異化」の次元に踏みいるとき、〈装う〉者は、自己の独自性と個性的なアイデンティティという課題を背負うことになる。

　このふるまいは、ひとまずは、差異を身にまとうことで、自己の独自な価値を認知させる企てだといってよい。だが、差異と独自性が眼目となることで、ファッションは形象的な美ないしは趣味の良さといった内容的な価値の選択から乖離(かいり)してゆく傾向を抱えこむ。ローライズをエスカレートさせてヒップラインを台無しにし、ズボンを靴で踏みつぶすほど下げて裾(すそ)に擦り切れをつくるとき、意外にも当人は、見栄えの悪さを自覚していることが少なくない。そこで(ウ)めざされているのは、他者と違う独自なオモシロサであり、しばしば他者もそれに対して「イケテル」という評価を与えるのである。

　こうした差異化の極北には、アンチファッションがある。それは、ラディ

カルに〈装い〉のコードを逸脱し、モードへの反抗をしかける。だがファッションの「戯れ」は、それさえもオモシロイ差異として、コミュニケイションの素材としてとりこみ、その活力の(d)カテとしてしまう。つまり、それが差異化の「戯れ」のさらなる展開を刺激する限りでは、「ファッション装置はそれ自身の否定を基礎として作用する」ともいえるのである。モードの活力の源は、スタイルの美的価値というよりも、互いに差異化を試みる自己増殖的なコミュニケイションにあるといってよい。ファッションの消費は、他者のふるまいとの嚙(か)みあわせ、差異化のやりとりのオモシロサを追求するものであり、まさにコミュニケイションそれ自体の「楽しみ」を追求する「戯れ」なのである。

〈装う〉者は、この「戯れ」の中で一つの逆説を抱えこむ。差異のオモシロサを追求するふるまいは、差異化の参照項となる他者のふるまいに左右される。アイビーやサイケの貴重な「お宝」も、その都度の他者のふるまいと嚙みあわないなら、コミュニケイションの「戯れ」が成り立たず、他者からの評価は期待できない。そしてまた、参照すべき他者たちのモードは、選択も統御もできない流動として、「戯れる」者に押し寄せてくる。(エ)「ファッションの消費を「戯れる」者は、モードの流動と差異化の関係に翻弄(ほんろう)され、身体的存在を自身で統御する自己所有の関係を、自ら掘り崩し

<u>空洞化させてゆくのである</u>。

自己所有の挫折（ざせつ）は、個々人の〈装い〉の全体構成にも確認できる。人民帽、ジャージ、ウェスタン・ブーツ、サイバー・ジャケット……。これら総体を自らの〈身ぶり〉とする者の身体的存在は、差異化の「戯れ」が招き寄せる文化価値の数だけ分裂しており、アイデンティティと呼びうる統一性をもっていない。むしろそれは、差異化の「戯れ」が生み落とす、分裂的なパフォーマンスの寄せ集めにすぎない。ファッションを「戯れる」者は、真の自己とは認めがたいバラバラな「演技的」パフォーマンスを、他者とのコミュニケイションの要請におうじて引きうけてゆく。自己所有を追求すべき〈装い〉は、自己の存在を(e)<u>ヒサン</u>させるパフォーマンスへと反転するのである。

（浅見克彦『〈装うこと〉の倫理─ファッション・消費・身体』より）

〔注〕○サルトル─フランスの哲学者（一九〇五～一九八〇）。
○キャミソール─肩紐（かたひも）でつるして肩を露出させた、女性向けの上半身用下着・上衣。
○G・ジンメル─ドイツの哲学者・社会学者（一八五八～一九一八）。

○ローライズ―股上（またがみ）を極端に浅くしたデザインのパンツ（ズボン）。

○アイビーやサイケ―いずれも一九六〇年代に流行したファッション・スタイルの一つ。

問一　傍線部(a)～(e)を漢字に改めなさい。はっきりと、くずさないで書くこと。

問二　傍線部(ア)「〈装い〉は、他者の視線を前にした身体的存在の危険を、減殺または回避する防衛の戦略である」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問三　傍線部(イ)「〈装う〉者が他者を前にして自己となり、自己として存立してゆく」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問四　傍線部(ウ)「めざされているのは、他者と違う独自なオモシロサであり」とあるが、どういうことか。八〇字以内で説明しなさい。

問五　傍線部(エ)「ファッションの消費を「戯れる」者は、モードの流動と差異化の関係に翻弄され、身体的存在を自身で統御する自己所有の関係を、自ら掘り崩し空洞化させてゆく」とあるが、どういうことか。本文全体の論旨をふまえたうえで、一六〇字以内で説明しなさい。

（次ページより解答欄）

問一

(a)

(b)

(c)

(d)

(e)

問二

問三

問四

問五

解答解説

第一講「差異」と「類似」を読む　解答

問一

「外的関係」は属性に還元できず、当の対象にとって本質的でないような関係であるのに対し、「内的関係」は全て属性に還元でき、当の対象にとって本質的な関係である。

問二

ラッセルと三浦俊彦の関係性を示すことで、全ての関係が当の対象の属性に還元できるとは限らない、あるいはある関係を当の属性に還元できたとしても必ず別の関係が残るということを強調しようとしている。

問三

属性の持ち主と属性との関係

問四

「先立つ」という関係が消去できない、因果関係を含まない非対称的関係という反例が存在するため、すべての関係が属性に還元できるとは限らない。

第二講「論証」を読む　解答

問一

百年前はお金があれば、農村の過剰人口を低賃金で雇って費用を抑え、機械制工場での大量生産で高収入を得られたので、お金の力があったが、現代ではお金があっても、利潤をあげるための差異を創る能力や知識を持ったヒトを買うことが出来ず、お金の力が無くなったということ。

問二

農村の過剰人口を低賃金で雇って費用を抑え、機械制工場での大量生産で高収入を得られたから。

問三

おカネの絶対的な力の終焉

問四

現代はおカネがなくともヒトの能力や知識で利潤をあげることが出来るから。

問五

現代はおカネがあっても、利潤をあげるための差異を創る能力や知識を持ったヒトを買うことが出来ないから。

第三講「心情」を読む　解答

問一

友人宅の鏡台から漂う母らしい化粧品の匂いを嗅いで、母のことが好きなのでうれしくなると同時に、友人の母に自分の母が負けていると思うと寂しくなるから。

問二（イ）

女手一つで息子を育てる意地を持つが故、母が誰にも迷惑をかけないことにこだわったということ。

（ロ）

母の意地が分るからこそ、夕食の時だけでもだれかと一緒にいたいという希望が叶えられないと思ったから。

問三

幼い作者は母と一緒にいたいと思っており、母が工事現場に行くため食事時の寂しさを和らげようとして作ってくれたおにぎりを拒絶したいと思ったから。

問四

作者は母と一緒にいたかったが、工事現場の仕事のためにそう出来なかったが故に、母を拒むようになったのと同様に、作者の子供達も作者と一緒にいたいが、あまり一緒にいることができないがゆえに、作者を拒むのではないかということ。

第四講「要約」する　解答

学問は疑いから始まるというが、その疑いの底に著者への信と自分への信があって初めて、疑いが学問的発見につながる。自信だけがあり著者を信じていなければ、疑問はミスプリか著者の思いちがいだと処理してしまい、熟考熟読にはつながらない。また、著者だけを信じ自分を信じていなければ、疑問として探索すべき事実の発見と確認ができない。二つの信念に支えられて注意深く事実を見ることで初めて、疑いが学問的発見につながる。

第五講　総合問題　解答

問一

(a)	憂
(b)	紡
(c)	銘記
(d)	糧
(e)	飛散

問二

装いは身体に対する認識を誘導・制御するものであり、他者から一方的に不本意な意味づけをなされる不安を削減し、自己の存在を自らで掌握しようとする試みだということ。

問三

身体を装う者は、自分に対する他者の印象と評価を引き受け、その都度自身の存在を反省的に選択・形成する行為を通じて、自律的で社会的な主体性を獲得していくということ。

問四

ファッションにおいて、内容的な価値の選択から乖離し、個性的な差異と変化を追求して自己の独自性と個性的なアイデンティティを認知させることが企てられるということ。

問五

ファッションは、相互承認のコミュニケイションであると同時に、他者との差異化を通じて自己の独自性と個性的なアイデンティティを提示する営みであるが、差異化の参照項となる他者たちのモードは、選択も統御もできない流動的なものであるため、他者から認知される自己の独自性を追求すると、自律的で社会的な主体性を見失うということ。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。